

ダニエル書11章32-35節 「神の振り分け」

1A 自分の神を知る人たち 32

1B 神を知る強さ

2B 堅く立つ信仰

3B 事を行なう強さ

2A 思慮深い人たち 33-34

1B 悟らせる 33

2B 巧言によって付かせる 34

3A 練り清め 35

本文

ダニエル書 11 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは 10 章まで来ました。午後礼拝にて、11 章を一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、11 章 32-35 節に注目します。

32 彼は契約を犯す者たちを巧言をもって墮落させるが、自分の神を知る人たちは、堅く立つて事を行なう。33 民の中の思慮深い人たちは、多くの人を悟らせる。彼らは、長い間、剣にかかり、火に焼かれ、とりことなり、かすめ奪われて倒れる。34 彼らが倒れるとき、彼らへの助けは少ないが、多く的人是、巧言を使って思慮深い人につく。35 思慮深い人のうちのある者は、終わりの時までには彼らを練り、清め、白くするために倒れるが、それは、定めの時はまだ来ないからである。

ここは、ユダヤ人に対する迫害の中で、彼らの中に練り清めが起こったという話です。8 章で学びましたが、ギリシヤの王アンティオコス・エピファネスが、ユダヤ人を徹底的にギリシヤ化していく迫害を行ないました。彼の軍隊は神殿での礼拝者をことごとく刺し殺しました。そして祭壇の上で、律法で汚れたとされる豚をささげ、その肉汁をそこらにばら撒きました。そして祭壇の上にゼウスの像を置きました。毎月 25 日、アンティオコス・エピファネスの誕生日を祝うとして、このゼウス神を拝まなければいけませんでした。豚を強制的に食べさせられ、割礼を赤ん坊に授けた母親は、さらし者にされ高所から赤ん坊とともに突き落とされました。

しかし、アンティオコス・エピファネスのこのギリシヤ化の方策は、彼に協力する者たちがいたから可能でありました。「彼は契約を犯す者たちを巧言をもって墮落させる」とあります。すでに律法を捨てていたヤソンという男を、エピファネスは大祭司に任命しました。それから、メネラオスという男が大祭司になりましたが、エピファネスが神殿のものを奪いに来た時に、メネラオスはこともあろうに、神殿の中を案内しています。

しかし、振り分けはそうした否定的なことだけではありません。振り分けによって人々が練り清められることがあります。「**終わりの時まで**に彼らを練り、清め、白くする」とありますね。これまで多くが信仰的には眠っていたかもしれない人々が、かえって強められることがあります。悪に加担するような背教者が出て来る一方で、ますます清められる人々も出て来るということです。イエス様も、ご自身が戻って来られるにあたって、「黙示 22:11 不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。」と言われました。

アンティオケ・エピファネスによる迫害の時に、マカバイ家の人たちが立ち上がりました。マカバイ家の祭司マタティアが、ゼウス神にいけにえを捧げることを強制した人々を、あのピネハスがかつて行なったように剣で刺して殺しました。そしてマタティアが、五人の息子たちと共に山中に隠れると、セレウコス朝に対する敵意を募らせていたユダヤ人がそこに集まってきました。マタティアはこれを軍に組織し、次第に本格的な反乱となっていきます。マタティアの死後、息子ユダがセレウコス朝からの独立を目指す戦争を開始しました。自分たちは貧弱な武装しかしていなかったのですが、ちょうどサウルの息子ヨナタンのように、「主の御心ならば、数が少ないのと、多いのは関係がない」と言って鼓舞し、勇猛に戦いました。それで、数々の戦いで相手側を撃破し、エルサレムを包囲して、相手の軍を要塞に封じ込めて、エルサレムに入城しました。そして、油を調合する八日間、その油がなくなることがなかったことをお祝いする、ハヌカーが始まっています。激しい迫害の中で、一人が主に立ち上がり、それに連なる者たちも起こされて、相変わらず迫害の手は止むことはありませんでしたが、秘かにユダたちに付いて行き、神を信じていました。こうやってユダヤ人の練り清め、霊的復興が起こったことをマカバイ記が記しています。

ここから私たちは、先週に引き続き霊の戦いについて学びます。私たちには、敵から信仰を振り落とすという攻撃があります。しかし、それがかえって私たちを強め、生かし、むしろ多くの人々が主を信じる、主に立ち返るという神の御業があります。

1A 自分の神を知る人たち 32

1B 神を知る強さ

初めに、「**自分の神を知る人たち**」とあります。彼らの力は、神を知っているところから出ていました。イエス様は、「ヨハネ 17:3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」とされていました。イエス様は、永遠のいのちとは、何か長く続く今の生命ではなく、神とキリストを知っていることそのものだと言っています。そして使徒ペテロは言いました。「2ペテロ 3:18 私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」イエス・キリストの恵み、そしてこの方を知っているということで成長しなさい、と言っています。ここで大切なのは、神を知っているということと、神について知っているということには大きな違いがあることです。神について知っているというのは、情報であ

り、知識でありましょう。しかし、神を知っているという時は、神と直接、向き合っていることのできる力です。神を人格的に知っているということでもあります。ちょうど老夫婦にある、成熟した、安定した関係にあるように、何度も、神に聞き、知恵を受け、導きを受け、力を受けている関係です。

私が、「この人はイエス様を知っている」と本当に思った人がいます。チャック・スミスという牧師でした。彼の説教する内容は、知識的には、情報としては必ずしも魅力的なものではありません。いつも、同じようなことを話していたような気がします。けれども、そこには新しく信じたばかりの人も、そして長年、牧会をしていた人も、神学校で教鞭をとっているような聖書学者も、一心に聞いていました。それは何かというと、知識を披露しているのではなく、人格から出て来る話だからです。イエス様を知識で知っているのではなく、人格で知っていることが分かるからです。イエス様が言われました。「マタイの 11:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」彼は、このことを新しく信じた人にいつも話していました。日々、主イエスご自身から学びます。主が語られることを聞き、それを熟考し、祈り、自分のものとします。この方をじっくりと見つめます。そして、その深い部分、人格的な交わりから出てくるものが、「神を知っている」ということになります。

2B 堅く立つ信仰

そして、神を知っていると次に、「**堅く立**」つことができます。私たちは先週、霊の戦いについて学びました。霊の戦いにおいて大切なのは、自分が戦っているところから引き下がらないことです。自分が信仰によって、ここまで前進したというものがありません。そうすると、圧迫や反対を外から受けるようになります。その時に、上手に納めようとして、何事も摩擦が起こらないように、自分なりに整理しようとして、するとどうなるのか？「まだ戦っているのに、戦いをやめてしまう」ことになるのです。相手はまだ武器をもって攻撃しているのに、自分で勝手に防御することも、攻撃することもやめてしまうことです。この時にサタンがあらゆる感わしをしていきます。

ですから、私たちは「戦っている」という事実を覚えている必要があります。しかも、「勝利している戦い」の中に入っていることを知るべきです。「1ヨハネ 5:4 なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。」私たちは、何もしていないのに敵から攻撃されていると思っはいけません。そうではなく、私たちのほうが、敵に対して攻め入っているのに、敵が反撃しているのです。いろいろな反対や圧迫が来る時に、それは信仰によって立っているからそうなっているのであって、信仰が弱まっているからそうなっているではありません。

パウロは、テサロニケの人々が新しく信じたばかりだったのに、自分が命の危険があるのでそこを出なければいけなかったのに、それでこんな心配をしていました。「1テサロニケ 3:5 誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけな

がたの信仰を知るために、彼(テモテ)を遣わしたのです。」誘惑者、つまりサタンがあなたがたの信仰を無き物にしようとしていると気がかりだったのです。けれども、そうではない、むしろ彼らが信仰と愛に満ちていた知らせを受けました。そしてこう言っています。「3:8 あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。」

3B 事を行なう強さ

そして、「**事を行なう**」と言っています。そうです、34 節で「**彼らへの助けは少ない**」とありますが、マカバイ家の人たちとその取り巻きは、本当に小さな集団でした。戦うのはあまりにも貧弱でした。けれども、その小さな者たちが、大きな軍隊に打ち勝っていきました。神を知り、堅く立っている者たちを通して、神は強い者、大きい者よりもさらに大きなことを行なわれます。ヘブル書 11 章には、信仰の英雄が出て来ますが、ギデオンがいます。彼は三百人で、13 万 5 千人にミデヤン人を倒しました。バラクは、デボラの助けを借りて、鉄の戦車を持つシセラ軍と戦い打ち勝ちました。サムソンは、ろばの骨一本で千人のペリシテ人を打ち叩きました。そしてこう言っています。「11:34 **弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。**」

ここで大事なのは、彼らが全く疑いなく、確信をもって戦ったかというところではなく、全くそうではなかったということです。「**弱い者なのに強くされ**」という言葉が大事です。ギデオンは何度も何度も疑って、最後は羊の毛を出して、そこだけ露が降りないように頼みました。恐れとの戦いがありました。その度に主が憐れんで助けてくださり、それで恐る恐る、一歩ずつ信じていきました。バラクも、デボラに行って戦いなさいという預言を受けたのに、「あなたと共に行かなければいけません。」と条件を付けたのです。サムソンは、自分が信仰をもって戦っているというよりも、ペリシテ人に復讐するために行った面が強いです。このように、彼らの信心深さについては、かなり疑わしいものばかりです。けれども、信仰というのは、こうした疑いがありながらも、「お言葉ですから、行なってみます。」という一歩踏み出す歩みであります。目に見えないものを見るようにして一歩前に進むのですから、当然、恐れや疑いと葛藤になるのです。100 年の確実性がない、私に疑いが残っている、だから行ないませんとしたら、それは既に信仰ではありません。

信仰というのは、神からの賜物です。「またある人には同じ御霊によって信仰が与えられ(1コリント 12:9)」とあります。上から与えられるものであり、私たちが信仰をもって何かを行なう時に、それは自分の力で信じることさえできないものです。神が聖霊の力によって、自分が信じてみようとする勇氣を出す時に与えてくださるのです。そして、一歩、信仰によって前に進めば、その後大胆さが与えられます。自分自身でも、「なんで、俺、こんなの信じているんだろう？」と信じている自分に不思議になることさえあるのです！

2A 思慮深い人たち 33-34

そして、どうして少ない人々によって、多くのことができるのかと言いますと、その少ない人々に

よって、神のなさっていることを悟る人々が起こされるからです。

1B 悟らせる 33

33 節に、「**民の中の思慮深い人たちは、多くの人を悟らせる。**」とあります。アンティオコス・エピファネスがユダヤ人をギリシヤ化しようとする試みに対して、多くのユダヤ人が追従したのですが、そこで踏みとどまったマカバイ家の人たちがいたので、それで人々が神の真理を悟っていったのです。全体の流れはギリシヤ化なのですが、心では何かがおかしいと感じていた人たちが多かったのでしょう。けれども、一人、二人と立ち上がったことによって、「やはり、これだったのだ。」と気づいて、それで主に従い、真の自由を得なければいけないと思ったのです。神の御霊の働きは、どの時代にもそのようにして力強く現れました。

例えば、今の福音的な教会は、ギターやドラムなど、現代になって使われるような楽器を使って賛美をしていますが、かつてはピアノとオルガンだけであり、それ以外は悪魔の楽器と言われていました。事実、ロックにおいては麻薬やオカルトを賞賛するものが多かったからです。けれども、1960-70年代、ちょうどベトナム戦争が終わって、ビートルズが熱狂的な人気を博していたあの時期に、全くキリスト教会とは無縁であった十代の子たちがイエス様を信じていきました。なぜなら、彼らは平和や愛を標語にして、既存の社会から離れて共同生活をするようになっていったからです。しかし、それを先導している人々が、フリーセックスや麻薬を薦めていったために、その子たちはそういったものにはまっていきました。けれども、何かが違うと思っていたことでしょう。そういう人たちを、ヒッピーと呼びます。ところが、ヒッピーの中からそのままの姿で、イエス様を信じて全く変えられた人々が起こされました。初めはとても少ない人数だったのですが、山火事が起こるかのよう、怒涛のごとく教会に押し寄せるようになったのです。セックスや麻薬では、決して愛や平和は訪れない。イエス様こそが、私たちの主ですと悟ったのです。そして、そういう子たちが悪魔の楽器と呼ばれていたギターで、主に対して歌っていったのです。米国で起こったその小さな動きが、世界中に瞬く間に広がり、今はキリスト教会に定着した礼拝賛美となっています。

このような御霊の働きは、数えきれないほどあります。例えばお隣の中国は、開放政策によって市場経済が部分的に採用されるようになりました。それによって拝金主義、物質主義が入り込みました。人々がお金ばかりを求めるようになりました。そこで、キリスト教が広がっています。若い子たちが多いですね。それは、皆が「私たちが生きているのは、本当に物だけなのだろうか？生きる価値は？」と飢え渴いていたからです。あまりにも物質的な世界観で育てられているので、そこに福音による生ける水について教わると、これこそが道なのだ気づくのです。

2B 巧言によって付かせる 34

そして興味深いのは、34 節にある「**多く人は、巧言を使って思慮深い人につく**」という言葉です。これはどういうことかと言いますと、「巧言」というのは上手に言いつくろって、という意味です。大

胆に、殉教も辞さないで果敢に主に従っていこうとする人々は実は、あまり多くいませんでした。迫害があまりにも激しかったからです。多くの人が、表向きはギリシヤ化されているように見せかけて、実は裏ではマカバイ家の者たちに付いて行った人々が多かったのです。それが、「巧言を使って思慮深い人につく」ということです。潜伏していた信者だった、いわば隠れキリシタンのように生きていたのです。

聖書には、「信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。(ローマ 12:3)」という言葉があります。信仰には、それぞれ量りがあります。ある人は大胆に信仰によって、あることが出来たとしても、全ての人ができる訳ではありません。しかし、信者たちが不完全でも、確かに、「私は、確かに主に付いて行きます」ということを心に覚える。主のために立っている人々を、助けるということも立派な主の働きです。ヘブル人への手紙で、信者らに励ましを与えています。「ヘブル 10:32-34 あなたがたは、光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めのころを、思い起こしなさい。人々の目の前で、そしりと苦しみとを受けた者もあれば、このようなめにあった人々の仲間になった者もありました。あなたがたは、捕えられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。」具体的に、人々の前で誹りと苦しみを受けた人々もいました。牢につながれた人もいました、けれども、そうした人々に助けを与え、世話をしていた時期がありました。こうやって、与えられた信仰を働かせていた人々が多くいたのです。

3A 練り清め 35

そして 35 節に、「思慮深い人のうちのある者は、終わりの時までには彼らを練り、清め、白くするために倒れる」とあります。私たちは、困難や圧迫、反対があっても、それでも神は私たちを練り清め、白くして下さるために用いてくださいます。神は、さまざまな困難の中で圧倒的な勝利者となることができるようにしてください。倒れているようで、実は倒れていない。もう終わっているようで、実は終わっていなかった。弱いようで、実は強い。パウロは、そのことを「土の器に入れた宝」として表現しています。「コリント 4:7-10 私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。」

私たちは神を知ること、堅く立つこと、弱くても信仰によって強められること、そして主によって立った人々と共に立つこと、その神の軍隊は倒れているように見えても、決して窮していない力を持っています。